

【香港】 『浮城』に見る返還後の 香港

谷垣真理子

一九九七年の返還から、二〇一二年七月一日で一五年が経った。返還前に繰り返し問いかけられたのは、返還後の香港はどうなるのかということであった。一九八四年の中英共同声明で、香港は一九九七年七月一日をもって中国に一括返還され、その後五〇年間、「一国二制度」のもと、特別行政区として高度の自治を享受することが中英両国で合意された。「一国」の旗のもとに香港の国防と外交は中央政府が担当することになったが、それまでの制度は返還後も維持されることになった。すなわち、香港の法律は返

還後もコモンローが運用され、香港ドルは返還後も引き続き使用されることとなった。

返還前における最大の不安は、返還後、中国中央政府が特別行政区・香港の内政に干渉することであった。しかし、現実に返還後の香港が直面したのは返還の翌日から始まったアジア通貨危機であり、感染症の拡大であり、新空港のシステムトラブルであった。一九九七年末の鳥インフルエンザでは、安全宣言を出した後、一転して区内の鳥類を全処分した。一九九八年七月には新空港が開港したものの、開港直後からコンピューターシステムが順調に作動せず混乱した。そして二〇〇三年三月、SARS（重症急性呼吸器症候群）が香港を襲い、国際ハブ都市であった香港を外国人が回避する状況となったのである。

しかし、こうした状況のなかで、返還前から香港に居住した人々が香港から続々と脱出したわけではない。「一九九七年七月一日が来たら、七月二日が来る」ように、日々を暮らし、中国という「一国」のなかで香港がどのように魅力ある「一都市」としての地位を保持するのかを求め続けてきた。

返還を跨ぐ香港の軌跡

二〇一二年の東京国際映画祭の「アジアの風」部門に参加した『浮城』は、こうした香港の状況を反映するかのこ

とく、主人公が繰り返し自分は何者かを問いかける。監督は一九八〇年代の香港ニューウェーブをけん引したイム・ホー（厳浩）で、七年ぶりの最新作である。残念ながら映画祭では制作サイドの事情で上映中止となったが、筆者はこの映画を十一月に広州に行った際に機内で鑑賞した。

ストーリーは、布華泉という主人公が刻苦勉励して英系企業の管理層へと上りつめていく成功物語である。

主人公は蟹家と呼ばれる水上居民の血を引く。水上居民は華南の沿岸や河川地域に分布する。陸上に家を持たず、船の上で生活し、漁業や水運、商業に従事し、陸上生活者から差別を受けた。ブルース・リーの『燃えよドラゴン』（一九七三）では、飛行機がビルの谷間においていく啓徳空港や人力車と並び、水上居民の船がひしめくアバディー（香港仔）を香港の象徴的存在として取り上げている。一九七〇年代から陸上への定住化支援がはじまり、かつての風景は現在では見かけられない。

一九四〇年、イギリス船員に乱暴されて妊娠した水上居民の少女がひとりの男の子を産み落としたところから物語は始まる。その子は流産したばかりの別の水上居民の女性に引き渡された。「子どもがもう産めないかもしれない」と思って引き取ったが、育ての母はその後、六人の子どもを授かる。主人公の布華泉は「教育は要らない」という父の言葉には従わず、船から陸にあがり、働きながら勉強す

る。ある日、父は漁に出たまま帰らず、主人公は一家の大黒柱として六人のきょうだいを育てることになるが、生活は困窮し、きょうだいは施設に預けられる。その後、布は英系企業に就職口を見つけ、漢字が書けたことから「事務職員」として採用される。布は二〇歳をすぎて夜学で小学校教育を受けなおし、人一倍の努力をして華人初の管理層入りを果たす。

映画で語られる香港

映画の中には一九六七年香港暴動や一九八二年の中英交渉の始まり、一九九七年の香港返還など、香港の現代史の重要な事件が印象的に盛り込まれている。『浮城』は、主人公の布華泉に託して、香港人の歩みとアイデンティティのありようだけでなく、英領植民地としての香港をも描いているように思われる（写真）。

布華泉には実在のモデルがいる（『啓航』二〇一二…一―二）。黎華安と盧金泉というふたりの水上居民である。

いとこどうしで、香港島の筲箕湾の中華基督会基湾堂の信者であった。貧しい家庭で小学校教育も受けていなかったが、英系企業で管理層入りを果たした。主人公の母のモデルは黎華安の母、布錦慧であり、香港で船長資格試験に合格した二人目の女性であった。盧は実父の死後、小学校をやめて漁に出た。一七歳で陸に上がり、働きながら教育を



写真 『浮城』(DVDパッケージより)

受けなおすが、その際、おばにあたる布錦慧の一家と生活をともにし、黎が盧の勉強を手伝ったという。

この映画の監督である嚴の高校の同級生は、たまたま黎華安と知り合いだった。嚴は黎の星島晚報のインタビュ記事(一九八〇年一月二三日)に興味を抱き、黎に出会った。黎は嚴に自分より漁民としての経験豊富な盧を紹介した。

かくて、南京条約により香港島が割譲された当初より香港に居住したであろう水上居民の子孫を主人公とする『浮城』が構想されたのである。嚴は黎と盧をあわせてひとり的人物として創造した。さらに、植民地としての香港の誕生の経過を象徴するように、主人公を不本意な妊娠の結果

生まれた欧亜混血児としたのである。

主人公・布が自分が何者か繰り返し自問するシーンが、香港人についてよく議論されるアイデンティティの葛藤と重なる。布は英系企業の管理層入りを果たすが、一九八一年の英国籍法の改正で、香港は独立していない英属領に分類された。その住民は英国籍を有するものの、英本国への居住権を持たない。イギリスに出張した布は、入国管理官に外国人の列に並びなおすように言われてショックを受ける。これらは第二次世界大戦後に中英両国の間に挟まれた香港という地域そのものを象徴している。

華洋混交のアイデンティティ

このように振り返ると『浮城』は語りつくされた話であるような印象を受けるだろうが、筆者は返還後の時の流れを実感せずにはいられなかった。返還前の熱気がさめ、ようやく英領植民地としての香港の歴史を冷静に見つめることが、香港では可能になったのだと思う。

『浮城』は、英領植民地のもつとも早期の「香港人」であった水上居民を主人公に据えることで、中国(主に中華人民共和国)とイギリスが対立する構造から距離を保つことに成功した。主人公(およびその家族)は、イギリスにくみする人々と彼らから虐げられているはずの人々の双方から差別される。

香港の「原住民」についての議論は驚くほど少ない。英領植民地としてのごく初期の歴史について、カール・スミスの研究は、最初にイギリス人と接触したのは水上居民や客家のような中国社会の周縁の人々であるとしている。同質的な集団とみなされがちな香港人の多様性を描くことで、観客は、『浮城』は布華泉の個人史であると同時に香港の地域史を鳥瞰するという印象を持つことになる。

香港を鳥瞰する『浮城』は、香港の過去を構成した要素として「西洋人社会」を取り上げる。映画の中では、主人公を「雑種」と蔑む尊大なだけのイギリス人社員が出てくる。しかし、その一方で布を評価しひきたてるイギリス人トップを映画は淡々と描き出していく。アヘン戦争時にイギリス船に食料や水を供給して財を成した先祖のように、布は英系企業のなかではじめて能力を評価される。

興味深いのは、『浮城』が親中国派が香港の戦後史で果たした影響をさりげなく肯定的に描いている点である。布が二〇歳を過ぎて通う夜学は中国寄りの夜間学校だった。学校で国旗として紹介されたのは中華人民共和国の五星紅旗だった。

一九六七年の香港暴動は親中国派のイメージを著しく損なった。親中国派は闘争委員会を組織して積極的に関与し、暴動の終わりの時期に親中国派は手製の爆弾を市街地のショッピングモールに置き、幼児が犠牲となった。こう

した経緯から、日本軍政下の抗日活動から戦後直後の労働運動まで、親中国派の香港史における足跡が香港社会で肯定的に語られることは、香港返還までなかった。

『浮城』を製作したのは、長城、鳳凰、新聯影業会社が合併した銀都機構であり、親中国系の映画製作・配給会社である（龍一九八六？…三二一三三）。『浮城』は、親中国派を再評価するだけでなく、主人公が尊敬するイギリス人上司をも描き出した。このような表現が可能であったことに、香港の親中国系企業もまた香港に土着化していることを筆者は感じる。

上映言語

最後に、個人的な希望も含めて言語の問題に触れよう。

『浮城』では、主人公を演じたアーロン・クオック（郭富城）は水上居民のなまりを習得し、サンパンと呼ばれる小舟の漕ぎ方も練習したという。銀都製作であるため、中国大陸でも上映が予定された。おそらく中国語標準語で上映されたであろうが、それでは『浮城』の何かが欠けてしまったのだろうか。

ブルース・リー以来の香港映画ファンである筆者としては、やはり香港映画は広東語で鑑賞したい。本誌でも西村氏が指摘しているが、「香港映画イコール広東語映画」となる状況は思いのほか遅い。当初より海外市場を重視して

いた香港映画界では、市場によって上映言語を選択していた。たとえば、香港映画の有力な市場である台湾向けには国語版が作成されていた。

しかし、『浮城』の鳥瞰的な視点は言語の壁を越えてしまいかもしれない。主人公・布華泉の妻の造形は、「ことばではなく行動を見て」とわたしたちに語りかけているような気がする。妻・阿姉は補聴器を必要とし、補聴器がないと会話を聞き取るのが難しい。映画の最後で、布華泉は阿姉の目を見ながら水上居民の恋歌を歌って愛を確認する。

それでは、言語を介さない香港的なものとは何だろうか。『浮城』では、主人公のきょうだいを預かる教会と、その責任者である中国人牧師の存在であろう。『浮城』のモデルのふたりは、映画化に際して、教会がなければ現在の自分はなく、劣悪な環境のなかでも刻苦勉勵することの大切さを若い世代に語りかけたかったという（『啓航』二〇二・二一三）。当初は西洋人牧師だったが、その補佐役が教会の牧師となっていく。主人公に勉勵することを勧めた中国人牧師はたびたび画面に登場する。

キリスト教という西洋の文化になじみ親しみ、刻苦勉勵する行為そのものが、香港に集う人々の「華洋混交のアイデンティティ」を象徴するものであり、まさに香港的なものである。香港史はこうした営みの積み重ねに思えてな

らない。欧亜混血の大富豪・何東（一八六二—一九五六）や錫家出身の愛国商人・霍英東（一九二三—二〇〇六）など、香港にはさまざまな「布華泉」がいる。

●参考文献

龍心（一九八六？）発行年不明のため推測 『香港的另一個政
府』海山圖書公司。

『啓航』（中華基督教會基滙堂青年部啓青团）、第五二期（二〇一二年七月）。

Carroll, John M. (1995) *Edges of Empires: Chinese Elites and British Colonials in Hong Kong*, Harvard University Press.

Smith, Carl T. (1985) *Chinese Christians: elites, middlemen, and the Church in Hong Kong*, Oxford University Press.

映画リスト

『浮城』……①浮城／浮城大亨／Floating City／Hundreds Years of a Floating City、②イム・ホー（嚴浩）、③二〇一二年、④香港、⑤広東語、英語、⑥東京国際映画祭（二〇一二、※上映中止）。

『燃えよドラゴン』……①龍争虎鬥／Enter the Dragon、②ロバート・クローズ、③一九七三年、④香港・アメリカ、⑤英語、⑥劇場公開（一九七三）、ビデオ・DVD・ブルーレイ販売。

著者紹介

①氏名……谷垣真理子（たにがき・まりこ）。

- ② 所属・職名……東京大学大学院総合文化研究所・准教授。
- ③ 生年・出身地……一九六〇年、大分県。
- ④ 専門分野・地域……現代香港論、華南地域研究。
- ⑤ 学歴……東京大学教養学部（アジア分科）、東京大学大学院総合文化研究所（地域文化研究）。
- ⑥ 職歴……東海大学文学部専任講師（二九歳から七年半）、同助教授（三七歳から一年）、東京大学大学院総合文化研究所助教授（三八歳から九年）を経て現職。
- ⑦ 現地滞在経験……二六歳から一年間、香港大学アジア研究センターに留学、客員研究員。
- ⑧ 研究方法……留学時代、バスやフェリーで香港をくまなく回り、就職してからは短期期間であっても年に二、三回は必ず現地に行くようにした。現地の「風」に触れることが研究の土台。インタビューや参与観察を活用。
- ⑨ 所属学会……アジア政経学会、日本華南学会、日本華僑華人学会、現代中国学会、日本比較政治学会、日本国際政治学会。
- ⑩ 研究上の画期……二〇〇三年のSARSの感染拡大。香港が国際ハブ都市であり、中国内地と香港との関係の深さを実感。以後、意識的にさまざまな地域との関係性のなかで香港を考察するようになる。
- ⑪ 推薦図書……古田元夫『ベトナムの世界史』（東京大学出版会、一九九五年）。
- ⑫ 推薦する映画作品……『悲情城市』（侯孝賢監督、一九八九年、台湾）。香港に限れば『女人、四十。』（許鞍華監督、一九九五年）。

【モンゴル】 大衆的プロパガンダと 「現実の社会」

木村理子

モンゴル映画は、スターリン時代、モンゴル^{*1}における大衆的プロパガンダの手段として誕生した。それ以前、モンゴルをモンゴル人民共和国成立へと導いた一九二〇年代の人民革命期における大衆的プロパガンダの手段は歌と歌を用いた演劇であった。

モンゴルを民主化へと導いた「民主化革命」と称されるモンゴル民主化運動のデモ・集会は、歌で始まり、歌で終わる。一九八九年九月から一九九〇年四月^{*2}までのモンゴル民主化運動は「歌による宣伝運動」であったと言っても過